スワーミ・ムクターナンダの言葉についての瞑想

イースターを祝うシッダ・ヨーガ・サッツァング

イーシャ・サーデサイ

神の神殿

バーバ・ムクターナンダが『プレイ・オブ・コンシャスネス』の中で語る物語では、ある聖人は死期が近づくと、自分の周囲にあるすべての人やもの――彼自身のグル、そして四方位と五大[MK1.1]元素に至るまで――に感謝をささげます。最後に、その聖人は「歩き、動き、話す神の神殿である自らの体に感謝し、敬意を表した」[i]と、バーバは述べています。

「体は神の神殿であり、神の存在は自分自身の内側に見いだすことができる」というこの概念は、多くの宗教や精神的伝統に見られます。例えば、キリスト教の聖書には、「見よ、神の国はあなたがたの内にある」という有名な一節があります。コーランでは、アッラーが人間を粘土から創り、自らの霊を吹き込んだと記されています。また、バーバが講話や信奉者との対話の中で好んで引用したインドの数々の教典においても、この教えはさまざまな形で繰り返し語られています。偉大な詩聖ニャーネーシュワル・マハーラージによる『ニャーネーシュワリー』(『バガヴァッド・ギーター』の注釈書)の次の一節を考えてみましょう。詩聖はクリシュナ神の視点からこう語ります。「私があらゆる形の中に存在し、万物が私の内に宿っていることに疑いの余地はない」

従って、ある意味では、これは広く知られた真理だと言えます。私たちの体は神を宿しているのです。しかし問題は、この体で生きる日々の体験と、この真理をどう一致させるかということです。私は幼い頃、このことに果てしない当惑を感じてい

たのを覚えています。それは、シッダ・ヨーガの教えを知的に理解するよりも以前のこと、自分が抱える困惑の原因を適切に言葉にすることさえできなかった頃のことです。私は窓の外を、時には何時間もじっと眺めながら、なぜ人は私を名前で呼ぶのだろうと考えていました。なぜみんな、「この」名前やこの顔、この体が「私」だと思うのだろうと不思議に思っていました。私の「中」には、もう一人の「私」がいました――私はそれを確信していました――そして、人々が執着しているような外側の装いよりも、その内なる存在こそが「本当」の自分であるように感じられたのです。

何年もの後、グルマーイとバーバの教えを本格的に学び始めるまで、私はその意味を理解できませんでした。だからこそ、バーバの代表的な教え「神は、あなたの中にあなたとして住んでいる」に、私はこれほどまでに啓示を感じるのだと思います――そして特に最後の2語、「あなたとして」という部分に。この言葉は、私が子どもの頃に抱いていた疑問を解き明かし、あの頃の不安を静めてくれます。私が人々に見てほしいと切実に願っていた「私」は、人々が見ることのできた「私」と切り離されて存在していたのではなかったのです。（バーバの教えとその意味について詳しく知りたい方は、スワーミ・イーシュワラーナンダのこの教えについての素晴らしい話を読むことをお勧めします）

ここでバーバが示している体が「神殿」であるというイメージは、とりわけ示唆に富んでいると感じます。神殿に身を置くことを想像すると、私の体験――神性の存在がまさにそこにあると肌で感じるようなあの体験――は、神殿に足を一歩踏み入れた瞬間に始まります。時にはそれよりも早く、外から神殿の建物を眺め、空に向かって伸びるそのカラシュを見た時から始まることもあります。もちろん、神殿の奥へと進み、最も神聖な区域に近づけば近づくほど、神の体験はより直接的で深いものになるでしょう。しかし、そこにたどり着くまでのすべての過程もまた、その体験の一部なのです。それは、私がどのようにその神格に近づき、理解し、敬うかを教えてくれます。その意味で、神殿の中にいることと神と共にいることは切り離すことができないのです。

これに関連して、問い掛けたいと思います。自分の体が神の現れであることを思い出すために、あなたはどのようなステップを踏むことができますか、あるいは、踏んでいますか？　春の息吹を吸い込み、それがもたらす期待と可能性が、あなたの展望を包み込む時間をもう作りましたか？

© 2026 SYDA Foundation®. 著作権所有。

[i] Swami Muktananda, *Play of Consciousness: A Spiritual Autobiography,* 3rd ed. (S. Fallsburg, NY: SYDA Foundation, 2000), p. 270.　日本語版『プレイ・オブ・コンシャスネス』p.284